

近代木版口絵画集・『小説挿画集』と『江戸錦』の位置づけ

——明治中期における春陽堂の木版出版活動からの考察

常木 佳奈(久留米工業高等専門学校 助教)

E-mail tsuneki@kurume-nct.ac.jp

要旨

明治期の小説本に付せられた木版多色摺口絵は、同時代の読者から高い関心を集めていた。そのため、口絵が本来の居場所である小説本を離れ、独立した形で読者の手に渡ることもあったようである。本稿では、春陽堂から出版された2種類の口絵画集・『小説挿画集』と『江戸錦』を取り上げ、その位置づけを試みた。春陽堂は木版印刷にとりわけ強いこだわりをみせていたことで知られているため、同社の出版活動を整理しつつ、先の2種類の口絵画集の分析を行っていく。

abstract

The woodblock multicolored frontispieces (*kuchi-e* prints) within novels of the Meiji period were of great interests to readers of the same era. Therefore, the *kuchi-e* prints were sometimes taken out of their original novels and made available to readers as independent forms. This paper examines the significance of two *kuchi-e* print collections published by Shunyodo; *Edonishiki* and *Shōsetsu Sōgashū*. As Shunyodo is known to have been particularly committed to woodblock printing, those collections' importance is discussed through Shunyodo's publishing activities.

1. はじめに

明治20年代中頃から大正初期にかけて刊行された書物、とりわけ小説を掲載した雑誌や単行本には、江戸時代に発展した錦絵を彷彿させる美しい木版多色摺の口絵が付されていることが多い。同時代においては「まづ貸本屋の店頭で客は口絵を先に見て借りて往く(中略)イヤモ斯うなると、小説を読むのだから、絵をなぐさむのだから分からなくなつて来る」¹⁾といわれただけでなく、作家・尾崎紅葉にも「今ハ口絵がなければ買つて呉れない世の中」²⁾とさえいわせたほど、口絵は読者が作品を手取るきっかけとなる一つの要素であった。つまり、〈オマケ〉のような立場の口絵が、読者にとっては雑誌・単行本のメインコンテンツである小説を超えた価値をもっていたのである。このような木版口絵は、錦絵の衰退によって仕事が激減した木版職人や木版再興を狙った出版社の試みもあり次第に隆盛を極めていったが³⁾、その後、制作費用が高んだことや、大正期に興る自然主義文学の台頭など、さまざまな要因をもって文化としては衰退していくこととなった⁴⁾。このように、日本近代期における木版口絵文化は30年弱の短い

ブームではあったものの、木版という伝統的な印刷の方法・文化が明治期にどのように受け継がれ、人びとに受け入れられたかについて考えるうえで、見過ごすことのできない存在である。

先にも引用したように、口絵目当てで書籍や雑誌を手取る読者が少なくなかったのだから、口絵が小説を離れて読者の手に渡ることがあったと想定するのが自然であろう。実際、現在の浮世絵市場においては、書籍から切り離された木版口絵が流通しているのを目にする。それにもかかわらず、これまでの先行研究において、小説を離れた口絵の事例が紹介されることはなかった⁵⁾。一方で口絵同様、小説と密接なかわりをもつビジュアル作品である挿絵については、画家サイドが挿絵集として作品をまとめ、出版しようとした昭和期の事例、そしてそれらを取り巻く出版トラブルが指摘されている⁶⁾。小説に付随するはずのビジュアル作品が本来の居場所から別の場所へ移り、読者の手に渡ろうとした事実は非常に興味深く、当時の出版文化を考えるうえで貴重な事例となることは間違いない。

さて、先に「これまでの先行研究において、小説を離れた口絵の事例が紹介されることはなかった」と述べた

が、筆者が参加しているプロジェクト・「近代木版口絵のデジタル研究環境基盤整備」(共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」2018年度～2019年度、国際共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ国際共同研究拠点」2020年度～現在)における調査で、口絵が小説を離れて読者の手に渡った、あるいは渡ろうとしたことを示す2種類の画集を確認できた。

以上を踏まえ、本稿では、明治期に春陽堂から出版された木版口絵画集『小説挿画集』と『江戸錦』を取り上げ、その位置づけを試みる。両画集の出版元である春陽堂は木版印刷にとりわけ強いこだわりをみせていたことで知られているため、同時代における同社の出版活動を整理しつつ、先の2種類の口絵画集の分析を行ってきたい。

なお、明治期においては石版や写真版など、近代的な印刷技術を駆使した口絵も多くみられるが、本稿で断りなく「口絵」と示した場合、木版多色摺のものであると同時に、折りたたまれた状態で書籍へ挿入された、いわゆる「近代口絵」⁷⁾を指すこととする。

2. 春陽堂書店と初代社長・和田篤太郎

春陽堂は、明治期においてとりわけ美しい装丁や口絵付書籍を発行した書店として知られている。ただし、同社は関東大震災や戦災で大きな被害を受けたことで当時の資料などをほとんど失っており、社史と呼べるものも編まれていないため、同社の歴史や動きを知るには、実際に出版された書籍や広告などをあたるしかない。こうした状況ではあるが、山崎安雄『春陽堂物語：春陽堂をめぐる明治文壇の作家たち』⁸⁾には、明治期における同社の出版活動を検討するうえでのヒントとなる記述があるため、以下へその概要をまとめておく。

春陽堂は、初代社長・和田篤太郎(安政4年(1857)-明治32年(1899))が明治11年(1878)に神田和泉町にて本の小売兼行商をはじめたことに端を発する。その数年後、篤太郎は芝の新桜田町(現・東京都港区西新橋)に書店をもつことになる。さらに明治17年(1884)に京橋区南伝馬町へ移った後、明治19年(1886)頃には日本橋通4丁目5番地へ落ちついた。その過程で篤太郎は、明治15年(1882)頃から出版業に手をつけたのではないかとされている。そして、翻訳出版をとおして小説家・須藤南翠と親しくなり、小説雑誌を創刊、さらにこれらの活動によって小説家とのコネクションを構築し、尾崎紅葉をはじめとした人気小説家の作品を刊行するまでに成長した。篤太郎の出版商法は手堅く、どんなに売れるものであっても初版1,500部以上は刷らない方針で、再版も1,000部ごとの小刻みにするほどであったとのことである。そのような篤太郎であったが、「やまつけ」もあったようで、ハンカチへ木版を手刷りして輸出したこともあった。周囲の反

対を押し切り、工場まで建てたが失敗に終わったとのことであるが、この件については後述の『美術世界』の成功によるものと考えられている。

『美術世界』は、明治23年(1890)から明治27年(1894)にかけて春陽堂から出版された美術雑誌であり、画家・渡辺省亭を編集主任とし、後進の模範となるべく著名な画家たちの作品を掲載していた。新井佐絵によれば、同雑誌は春陽堂が『木版術の進歩』にこだわった⁹⁾うえで刊行されたものであり、春陽堂の木版出版について考えるうえで、極めて重要な位置を占める。

以下に、同社の「木版術の進歩」に対するこだわりが窺える文章を引用する。なお、以下は『美術世界』第11巻巻末の「稟告」から引用するが、当該頁を欠く現存本も多いことを断っておく。

従来摺方については種々苦心を費やせしも何分満足の域に至らざりしが本巻を手始めとして毎巻美術印刷に著名なる「国華」の印刷師田村鎌之助へ摺方を委託し十分の時日と費用を抛ち従前よりは一層精美の印刷となし其外彫刻製本紙質等も極めて精良をつとむる事にせり¹⁰⁾

『美術世界』の大半は編集・渡辺省亭、印刷・吉田市松、彫刻・五島徳次郎のメンバーで発行されているが、第11巻から第14巻には田村鎌之助、第15巻および第16巻は小松角太郎が印刷者として奥付に明記されている。一時的に摺師が市松から鎌之助へ交替した理由については先の引用文のように説明しており、発行の途中で摺刷の質を高めるために『国華』の摺師へ印刷を委託するほどに熱心であった様子を見て取ることができよう。『美術世界』の発行にあたってはその分野に精通していた省亭を編集者として据えるだけでなく、摺師や彫師の選定、製本および紙質にもこだわりをみせていたことから、春陽堂が木版技術の向上に意欲的であったことは明らかである。

以上のように、明治中期における春陽堂は、初代・篤太郎の在職中、特に木版印刷へ力を入れていた。この点については、篤太郎は、もともとは洋画を学んでいたともいわれるため、美術や意匠に対する強い思い入れの表れと捉えることもできよう。

3. 『小説挿画集』と『江戸錦』

ここで、本稿で取り上げ、その位置づけを試みる『小説挿画集』(雪・月・花の巻)と『江戸錦』(月の巻)、2タイトル計4巻の木版口絵画集について整理する。これらは春陽堂から過去に出版された単行本の口絵のなかから前者は17点、後者は20点を選び抜いてまとめたものであるが、これまでの研究で取り上げられることはなかった。とりわけ後者は、久保欽哉(編)『春陽堂書店発行図書総目録(1879年～1988年)』¹¹⁾(以下、

『総目録』においても「明治年間発行年月不明出版物」に分類されており、長年、詳細不明な出版物とされてきた。口絵は本来、内容的にも物理的にも小説を離れることはできないはずであるが、これら2種類の画集の存在によって、口絵が小説から切り離され、独立した状態で読者の手に渡っていた、あるいは渡ろうとしていた可能性を指摘できよう。

なお、管見の限り、両画集の現存状況については以下のとおりである。

○『小説挿画集』

- ・国立国会図書館：雪・月・花の巻¹²⁾
- ・個人(朝日智雄氏)：雪の巻

○『江戸錦』

- ・オーストラリア国立図書館：月の巻¹³⁾
- ・個人(朝日智雄氏)：月の巻

3-1. 『小説挿画集』の奥付

『総目録』によれば、『小説挿画集』は雪・月・花の全3巻の画集であり、現存も確認できている。以下へ、その奥付に記載されている内容を引用する。なお、国立国会図書館デジタルコレクションでは、「雪の巻」と「月の巻」の奥付は記載内容が同一であったが、「花の巻」は奥付が欠落している。原本調査を行ったところ、表紙や台紙から、国会図書館が所蔵する「花の巻」は改装本であることが判明した。国会図書館以外には「花の巻」の現存を確認できないため、同巻の原装本における奥付の有無や、出版時期などの詳細については現時点で知ることができない。

明治卅年十二月廿九日印刷
明治卅一年一月一日発行

編集者 中村壮

東京市日本橋区通四丁目五番地
発行者 和田篤太郎

東京市深川区亀住町六番地
印刷者 西村熊吉

東京市日本橋区通四丁目五番地
発行者 春陽堂

ここに印刷者として記載されている「西村熊吉」は、春陽堂の木版摺師である。山中古洞『挿絵節用』¹⁴⁾によれば、父親の代から春陽堂の専属木版摺師として活躍していた吉田市松が、あるトラブルによって同社を去り、弟子であった熊吉がその後任に就くこととなったとのことである。口絵においては彫・摺師の名が作品に直接記されることは稀なことであるため、この『小説挿画集』に収められている口絵すべてが熊吉によるもの

と判断しても良いか疑問は残るが、少なくとも彼がこの画集の発行にあたって、同社の専属木版摺師として責任ある立場にあったと認識することに問題はないだろう。

なお、編集者として記載されている「中村壮」についての詳細は現時点で調査できていない。

3-2. 『江戸錦』の奥付

『江戸錦』は『総目録』に「明治年間発行年月不明出版物」として記載されていることからわかるように、長年、国内においてはその存在を確認できていなかったようである。こうした状況であったが、筆者がオーストラリア国立図書館の「Clough's *kuchi-e* Collection」¹⁵⁾にかんする調査を進める過程で、同館が『江戸錦』を所蔵していることが判明した(Bib ID: 7331938)。同館所蔵の『江戸錦』については2019年に筆者がデジタル化を依頼し、現在は『Catalogue』(<https://catalogue.nla.gov.au/>)を通して閲覧可能である。

以下へ、『江戸錦』の奥付記載の内容を引用する。

明治四十四年十二月廿二日印刷
明治四十四年十二月廿五日発行

画集江戸錦
売価金式円三拾銭

東京市日本橋区通四丁目五番地
編集兼発行者 和田静子

東京市本所区横綱町一丁目五番地
印刷者 堀井金五郎

東京市日本橋区通四丁目角
発行所 春陽堂

なお、『江戸錦』については、「月の巻」以外の巻は管見の限り現存が確認できておらず、先に挙げた『総目録』への記載もない。奥付に記載はないものの、表紙に「月の巻」と巻タイトルが記載されているため、『江戸錦』も『小説挿画集』同様、発行後、あるいは発行の準備ができた後、シリーズとして別の巻を発行しようとしていたことが推察されよう。ただし、『江戸錦』の現存は現時点で2点を確認できるのみであることを踏まえると、そもそも同画集出版の計画自体が頓挫し、流通に至らなかったものの一部が残り、何らかの理由で後年になって市場へ流通した可能性が高いと考えられる。

3-3. 『小説挿画集』・『江戸錦』再録作品など

『小説挿画集』および『江戸錦』に再録されている図について、もともと口絵として挿入されていた書籍のタイトル、絵師名、書籍の著者、出版年を表1から表4へまとめた。表からわかるとおり、『小説挿画集』と『江戸

錦』との間で、かなりの数の作品が重複している。

また、横綴じで作品を収めていく体裁は両者同様だが、構成については大きく異なる。『小説挿画集』は、右頁に画題(書籍名とは異なる、口絵そのものに対するオリジナルな画題)、絵師名、書籍の著者名、書籍、書籍名、解説を掲載し(図 1)、左頁に図を掲載する形式で、見開きで一作品を紹介する形をとっている。一方で『江戸錦』は、そのように作品一つひとつを解説することはせず、目次に「江戸錦月の巻内容」と記載し、「小説題号」と「執筆画家」を一覧で掲載しているのみであり、さらには『もしや草紙』(福地桜痴(著)・水野年方(口絵)、明治 31)を「もしや草紙」と誤植するなど、十分に準備されたうえでの発行とは言い難いつくりである。

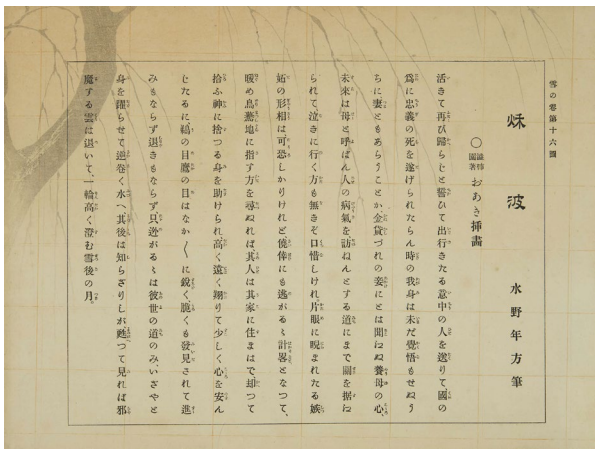


図 1 『小説挿画集』雪の巻(春陽堂、明治 31)より
『おあき』解説 (朝日智雄氏蔵・立命館 ARC 画像提供 / 79300396-01)

3-4. 『江戸錦』序文

『小説挿画集』にも、序文や賛が掲載されているが、ここでは『江戸錦』に掲載されている書家・永井素岳の序文を引用する。

江戸錦叙

画ハ心を運筆に現はして典雅なり絵は意を配色に注ぎて華麗なり近代此典雅を措て華麗に時の風俗を寫せしは浮世絵なり師宣長春の如き巧者出しも剗刷印搦の進まさるより仕事も多く印刷に筆を執らさりし為め廣く坊間に行はれさりき二世豊国専ら印刷を奨励し終に東錦絵と賞され江戸の名物に美へられたり

されと錦絵は浮世絵一派にてありしか近きころは各流の人筆を染め典雅華麗としに筆の神を印刷の上になしその色彩万度に垂れたる織巧を極むるに至りしは之れ錦絵の餘風に他ならず山河草木の濃淡雲烟の暈々たる如き刷子の巧案は吾特有の工芸美術なり曩に春陽堂は美術世界を始め木版印刷の発行に名ありこの一編を通覧するに多く

は余か友人知己の筆になり能く諸氏の筆意を現はす剗刷印搦の巧みなるは古今の風俗を問はず印刷の昔を偲ひて江戸錦と號けしものならむ云爾 四十四のとし極月 応需永井素岳前書(印)

以上のようにこの序文には、彫りや摺りが巧妙な錦絵は日本特有の工芸美術であるが、とりわけ春陽堂は『美術世界』をはじめ、木版印刷の発行で著名なことが記されている。『美術世界』においても摺刷の質を高めるために『国華』の摺師へ印刷を委託するほどに熱心であったことは先にも述べたが、木版に対する並々ならぬこだわりがあった春陽堂にとって、口絵を口絵としての役割のみに留めておくのではなく、木版画の一作品として読者に鑑賞してもらいたいという狙いがあったのかもしれない。

なお、引用文をみればわかるとおり、既刊書籍の口絵を再度まとめた画集であることには触れておらず、あくまでも木版技術と春陽堂という点にフォーカスした内容となっている。口絵の転用について触れることを避けた意図の有無はこの序文からのみでは判断しかねるが、読者への配慮として、転用であることを書籍のどこかへ記しておくのが適切だったのではないだろうか。ただしこれについても、口絵を小説本の付属物ではなく、一つの独立した版画作品として認識してもらいたいという狙いゆえの戦略だった可能性も指摘できる。

4. 『小説挿画集』・『江戸錦』にかんする考察

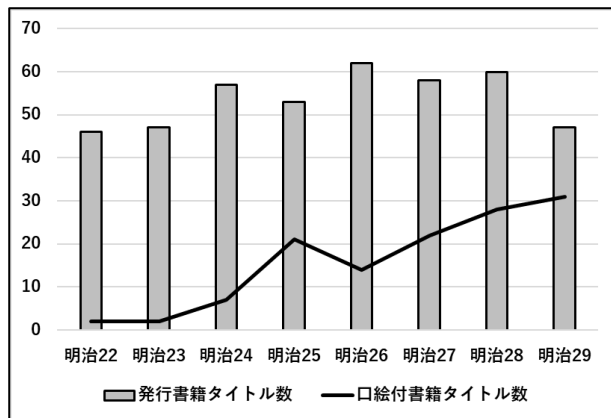
以上、明治中期における春陽堂が木版印刷にこだわりをみせていたこと、その同社が『小説挿画集』と『江戸錦』の 2 種の木版口絵画集を発行していたことを確認した。ここではまず、美術・木版出版に対して熱心に取り組んでいた初代社長・和田篤太郎の在職中に出版された書籍に占めるうち、口絵付書籍の割合を確認するが、今回は口絵文化の初期からある程度の定着をみせた明治 22 年(1889)から明治 29 年(1896)までの 8 年間にフォーカスすることとする。あわせて、木版口絵画集・『小説挿画集』と『江戸錦』について、再録されている作品の傾向や出版時期などを踏まえ、その位置づけを試みる。

研究の方法としては、先にも挙げた『総目録』をもとに、明治 22 年から明治 29 年までに春陽堂から発行された書籍をすべてリストアップし、それらについて近代口絵が付されているか否か、『国立国会図書館デジタルコレクション』や『近代書誌・近代画像データベース』¹⁶⁾、『口絵ポータルデータベース』¹⁷⁾などをもとに調査した。いずれのデータベースでも書籍を確認できなかったものは 40 件程度あったが、そのうちの多くは同一シリーズで近代口絵が付されていないことを確認できているため、口絵なしと判断した。

4-1. 明治 22 年から明治 29 年までの口絵付書籍

まずは、明治 22 年から明治 29 年にかけて、春陽堂から発行された書籍のタイトル数と口絵付書籍のタイトル数の関係から整理する。

表 5 明治 22 年から明治 29 年までに春陽堂から発行された書籍のタイトル数と口絵付書籍のタイトル数



※久保欽哉(編)『春陽堂書店発行図書総目録(1879年～1988年)』(春陽堂, 1911)を基にした調査により筆者作成

発行タイトル数としては、各年、45～60点程度で安定しており、年ごとに大きな変動をみせないことから、先に述べた篤太郎の「手堅い」出版商法が窺われよう。一方で、口絵付書籍のタイトル数は、明治 26 年(1893)にわずかに減少しているが、点数としても総発行数における割合も年を追うごとに増加傾向にある。ちなみに、明治 26 年は春陽堂が「探偵小説」シリーズのうち 1 巻から 24 巻までを一挙に発行した年であり、同シリーズには口絵が付いていないため、口絵付書籍のタイトル数が減少したように見えるのである。春陽堂に限らず出版界全体をみても、明治 20 年代前半から 20 年代末にかけては口絵付書籍のタイトル数が急激に増加していた傾向にある¹⁸⁾ため、同社も流行に乗る形で、あるいはその流行を牽引する形で木版口絵摺刷の体制を整えていったのではないかと推測される。

4-2. 『小説挿画集』と『江戸錦』の再録作品

調査に着手する以前、筆者は、『小説挿画集』と『江戸錦』に再録されている作品の選定基準については、A) 特に人気の高い絵柄あるいは絵師の作品をピックアップした、B) 口絵として摺刷されたもののうち余剰が生じているものを選んだ、C) 彫師あるいは摺師の卓越した仕事の成果といえる作品を選定した、という三つの仮説を立てていたが、ここまでの調査により、いずれの可能性も否定できてしまった。

そもそも『小説挿画集』に再録された口絵はもとの書籍の出版時期が明治 24 年(1891)から明治 29 年にかけてのものであり、その間に春陽堂から出版された木版口絵付書籍のタイトル数は約 120 点、そのうちの 51 点は画集に収められているので、特に人気の高い絵

柄を選び抜いた可能性は低く、A については否定できる。B については、口絵の摺刷にあたっては当然枚数に余裕をもっていたはずだが、先に述べた初代社長の篤太郎の堅実な性格を踏まえるとそこまで多くのストックを有していたとは考えにくい。また、『小説挿画集』と『江戸錦』の発行日には 10 年以上の開きがあり、両者ともにストックを捌けさせるための発行と捉えるのは不自然である。さらに、両画集に再録されている作品をみると、「蝦夷錦」や「鎌はぬ坊」などの一部の作品についてはとりわけ高い木版技術が用いられているが、大部分の作品は至って普通の木版多色摺口絵であることから、C の可能性も低い。

では、一体どのような基準で載録作品を選んだのか。この問題については、口絵を描いた絵師が明らかになっている作品から優先的に選んだのではないかと推測できる。たとえば明治 25 年(1892)をみると、口絵付書籍のタイトルは 19 点で、うち 8 点が『小説挿画集』へ再録されている。選ばれなかった 11 点のうち 3 点は口絵に絵師の印がなく、4 件は印があっても判読不可なうえに新聞広告などにも絵師名が記載されていない。『小説挿画集』と『江戸錦』へ再録されている口絵においては、画師の印がないものも一部確認できるが、そのようなものであっても新聞広告などから誰が口絵を手がけたのかは明らかになっている。木版印刷に対して特にこだわりをみせていた春陽堂なのであるから、画集として作品をまとめるにあたっては、その絵を手がけた絵師を明確にしておく必要があったのではないだろうか。

4-3. 橋南堂『思ひざめ』から考える、口絵が小説を離れる際の加工

ここで、春陽堂のほかでも口絵が小説を離れ、独立した形で読者の手に渡った可能性のある事例を指摘する。図 2 と図 3 は両者とも後藤宙外『思ひざめ』(橋南堂, 明治 40)に付された鱒崎英朋の口絵の一部をトリミングした図版であるが、注目したいのは彫師を表す印の有無である。朝日智雄氏が所蔵する同口絵 7 点(うち 6 点は口絵単体で、1 点は書籍に挿し込まれた状態で所有)を比較すると、3 点には彫師・山脇義久を表す「義久刀」が見られ(70500210-01・02・03)、残りの 4 点(70500211-01・02・03、BK70500210-01)にはその印がない。また、オンラインデータベース上で現在確認できる他機関所蔵作品のいずれにも「義久刀」は見受けられない。

それぞれの作品を詳細に検討した結果、「義久刀」がある 3 点にはいずれも中折れがなく単行本に挟まれた形跡がない一方で、そのほかについては単行本に付属した状態での所蔵もしくは現時点では一枚物の状態であっても中折れがあるという区別をつけることができた。もちろん、単行本初版のために摺刷された口絵のなかに何らかの理由で「義久刀」を入れるものと入

れないものが混在した可能性や、単行本重版に際して口絵に変更を加えた可能性もあるが、前者は先に述べた区別がついているためにその可能性は低く、後者も管見の範囲で『思ひざめ』の重版がないことを踏まえると可能性は低い。そうなるとやはり、口絵としての役割とは別に、一枚物として配布あるいは販売されるにあたり差別化を図った可能性が残る。

春陽堂が『小説挿画集』に再録する口絵作品を選定する際、その絵を手がけた絵師を明確にしておこうとしたという4-2の考察を踏まえれば、他社の出版物である『思ひざめ』についても絵師だけでなく彫師の名を画面上に記載することによって、口絵を小説から独立した一つの木版作品として捉えさせようとした狙いが窺われるのである。口絵は作品の特性上、画面上に記載される文字情報がもともと少ない。そうしたなかで独立した作品として捉えられるためには、少なくとも絵師の名、さらに言えば制作に携わった職人の名を改めて記載する必要があったのだと考えられる。



左: 図2 後藤宙外『思ひざめ』(明治40, 橋南堂)

口絵: 鱒崎英朋 (朝日智雄氏蔵・立命館 ARC 画像提供 / 70500210-01)

右: 図3 同上 (朝日智雄氏蔵・立命館 ARC 画像提供 / BK70500210-01)

4-4. 『小説挿画集』と『江戸錦』の位置づけ

最後に、『小説挿画集』と『江戸錦』がどのような背景をもって発行されるに至ったかについて考察する。『小説挿画集』については、雪・月の巻(おそらく「花の巻」も)ともに明治31年(1898)元旦の発行であるうえに販売価格が明記されていないところをみるに、こちらは得意先への年賀を想定して作成された可能性が高い。一方で、『江戸錦』の発行日は明治44年(1911)12月25日であるため取り立てて特別な日ともいえず、奥付へ価格の明記もされていることから、一般へ販売される予定であった、あるいは販売されたものであった可能性が高い。

注目しておきたいのは、両画集の発行年である。篤太郎は『小説挿画集』が発行された数年前から体調が優れず入院しており、明治32年(1899)には逝去している。明治31年を篤太郎の晩年として、そして明治44

年の年末を彼の13回忌を控えた時期として捉えれば、『小説挿画集』は木版印刷術の向上に意欲的であった篤太郎の(最後)の仕事であり、『江戸錦』は篤太郎の13回忌へ向けて社としてその仕事を振り返ったものと捉えることはできないだろうか。各画集の序文に発行の背景を記述しなかったのは、口絵を一つの木版画として捉えてもらいたいという篤太郎の願いが込められていたためかもしれない。

出版の背景についてこれ以上議論できる材料は現時点で揃っておらず、説得力に乏しい考察ではあるが、『江戸錦』発行時には『小説挿画集』発行以降に発表された新たな口絵が多数あるにもかかわらず、『小説挿画集』と多くの重複を許したことを踏まえれば、『江戸錦』が篤太郎の存在を意識したうえで発行されたと考えられることができるのである。

5. おわりに

以上、明治中期における春陽堂が木版印刷へとりわけ力を入れていたことを確認し、さらに出版書籍のタイトル数と木版口絵付書籍のタイトル数との関係を整理したうえで、『小説挿画集』と『江戸錦』を篤太郎の春陽堂における仕事の成果として位置付けた。現時点では課題や再検討の余地が残されている部分もあるが、これまでの先行研究において口絵が小説を離れ、独立した形で読者の手に渡った事例が紹介されることがなかったことを踏まえれば、本稿で一定の成果を残すことができたのではないかと考えられる。

ここで、「おわりに」のなかではあるが、調査の過程で直面した、その資料がもつ意味の判断に悩む作品を紹介しておく。図4は、『江戸錦』に再録された武内桂舟の「鬼一口」である。同タイトルは宮崎三昧による小説として、明治28年(1895)に春陽堂から単行本として出版されている。鯉とともに、山口素堂の「目に青葉山ほととぎす初鯉」という俳句が描き込まれた作品である。図5は、単行本『鬼一口』(春陽堂, 1895)へ口絵として付されている状態の作品だが、これも同じく素堂による句を確認できる。問題となるのは、図6のカリフォルニア大学パークレー校所蔵の『鬼一口』の口絵である。その違いは一目瞭然で、図4、図5の素堂による俳句の部分が、「游戲廬主人」(『鬼一口』作者・宮崎三昧)による別の文章に代わっているのである。図5、図6の作品が綴じ込まれている単行本の奥付によればいずれも「初版」とのことであるが、同時代の奥付に記載された情報については鶴呑みにできないため、更なる調査が必要といえよう¹⁹⁾。ちなみに、「近代書誌・近代画像データベース」によれば、鶴見大学図書館が所蔵する単行本の口絵は図5と、早稲田大学図書館の単行本口絵は図6と同じものであり、いずれも「初版」とされている。『小説挿画集』にも「鬼一口」が収録されているが、図5と同じもの、つまり、『江戸錦』と同じものということになる。

たとえばこれらが、単行本のための口絵と、『小説挿画集』や『江戸錦』といった画集へ再録するための口絵で、作品の一部に変更を加えたのであれば納得もしやすいだろう。単行本の出版から16年もの歳月が経過しているので、色板を再制作したとしても不自然ではない。ただし、同じ単行本にもかかわらず、作品の一部が異なる口絵をなぜ複数用意したのかについては現時点では判断できない。また、『小説挿画集』と『江戸錦』の再録作品を選定する際、どのような理由で山口素堂版の口絵を選んだのか、もしくは両画集で同じものとなったのは偶然によるものだったのかという点も疑問が残る。

近代口絵にかんしては、現時点では十分な研究蓄積がなされていない状況である。今後、思いもよらない資料や課題に直面することが考えられるが、本稿で取り上げたデジタルヒューマニティーズ型的手法によって、同分野の新たな研究の可能性を切り拓いていきたい。



図4 『江戸錦』(明治44, 春陽堂)より
武内桂舟「鬼一口」(朝日智雄氏蔵・立命館ARC画像提供/AB0001)



図5 宮崎三昧『鬼一口』(明治28, 春陽堂)
口絵:武内桂舟(筆者所蔵・立命館ARC画像提供/
[b0003](#))



図6 図5と同じ
(カリフォルニア大学パークレー校東アジア図書館所蔵
/ [A152.11](#))

[付記]

本研究は、JSPS 科研費(研究課題番号:20K22005)の助成を受けたものである。また、本稿は第102回国際ARCセミナー(2022年5月25日, Web 配信)における口頭発表「明治期における春陽堂の木版出版について:口絵画集『小説挿画集』と『江戸錦』の位置づけ」を原案としている。

[謝辞]

本稿の執筆にあたり、調査にご協力いただいた朝日智雄氏に厚くお礼申し上げます。また、翻字については、立命館大学大学院修了生(匿名希望)にご協力いただきました。ここに、感謝の意を表します。

[注]

- 1) 「戦後の貸本屋」(新小説10(12), 1905)
- 2) 「文壇雑俎 紅葉氏の新聞小説論」『読売新聞』(1899.2.13 別刷)
- 3) 岩切信一郎「近代口絵論:明治期木版口絵の成立」(東京文化短期大学紀要 (20), pp. 13-23, 2003)
- 4) 山田奈々子『木版口絵総覧:明治・大正期の文学作品を中心として』(文生書院, 2016)
- 5) 日本近代文学館(編)・出口智之(責任編集)『明治文学の彩り:口絵・挿絵の世界』(春陽堂, 2002)において、雑誌の新年号の附録として既刊の口絵・挿絵の図像を転用したイラストを含むカルタの事例が紹介されているが(「新小説」(春陽堂, 明治31.01)), こちらはあくまでも図像の一部転用であり(構図がそのままではなく、トリミングされている)、口絵がそのままの形で小説を離れた事例ではないため、本稿が意図する「小説を離れた口絵」として扱わない。

- 6) 出口智之「新聞小説と挿絵に関する問題系 : 『大菩薩峠』をめぐる石井鶴三宛中里介山書翰から」(信州大学附属図書館研究 S, pp. 81-88, 2017) ほか
- 7) 岩切は注 3 に挙げた論考のなかで、明治中期より「以前の口絵と称されるものとは区別するために」、「近代口絵」という呼称を用いている。
- 8) 山崎安雄『春陽堂物語: 春陽堂をめぐる明治文壇の作家たち』(春陽堂, 1969) 同書は本人の没後、残されたメモ等をもとに非売品の書籍としてまとめられたものである。
- 9) 新井佐絵「多色摺木版画雑誌『美術世界』(渡辺省亭編・春陽堂)」(『近代画説』(26), pp. 152-169, 2017)
- 10) 渡辺省亭(編)『美術世界』第11巻(春陽堂, 1891)
- 11) 久保欽哉(編)『春陽堂書店発行図書総目録(1879年~1988年)』(春陽堂, 1991)
- 12) 国立国会図書館『国立国会図書館デジタルコレクション』<https://dl.ndl.go.jp/>(閲覧日:2022/10/29)
- 13) オーストラリア国立図書館『Catalogue』<https://catalogue.nla.gov.au/>(閲覧日:2022/10/29)
- 14) 山中古洞『挿絵節用』(芸艸堂, 1942)
- 15) オーストラリア国立図書館には、リチャード・クラフ(Richard Clough)が蒐集した約430点におよぶ口絵コレクションが収蔵されている。
- 16) 国文学研究資料館『近代書誌・近代画像データベース』<https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/>(閲覧日:2022/10/29)
- 17) 立命館大学アート・リサーチセンター『口絵ポータルデータベース』https://www.dh-jac.net/db/nishikie/search_kuchie.php(閲覧日:2022/10/29)
- 18) 拙稿「近代木版口絵の制作過程とその体制: 朝日コレクションのデジタル化プロジェクトを通して」(アート・リサーチ(19), pp. 3-14, 2019)
- 19) 画面上に描かれる内容が大きく異なる事例ではないが、注 5 に挙げた『明治文学の彩り: 口絵・挿絵の世界』において、木版だけでなく石版にいたっても同一絵柄の版が複数用意されていたことを伺わせる挿絵の存在が指摘されている(東海散士『佳人之奇遇』初編 石版挿絵: 絵師不明(博文館, 明治19.03の再版))。

表1 『小説挿画集』雪の巻(春陽堂, 明治31)(国立国会図書館所蔵本を基に作成)

	書籍名	絵師名	著者	出版年
1	伽羅枕	武内桂舟	尾崎紅葉	明治24
2	露子姫	渡辺省亭	石橋忍月	明治22
3	丸二ツ引新太平記	久保田米僊	山田美妙	明治24
4	二人女	武内桂舟	尾崎紅葉	明治25
5	鬼奴	武内桂舟	村上浪六	明治25
6	二枚袷	武内桂舟	川上眉山	明治26
7	こぼれ萩	武内桂舟	中村花瘦	明治26
8	春雨傘	渡辺省亭	福地桜痴	明治27
9	深見笠	武内桂舟	村上浪六	明治27
10	心の闇	富岡永洗	尾崎紅葉	明治27
11	蓮の露	武内桂舟	石橋忍月	明治27
12	片ゑくぼ	渡辺省亭・水野年方	尾崎紅葉・小栗風葉	明治27
13	なにがし	鈴木華邨	尾崎紅葉・泉鏡花	明治28
14	鬼一口	武内桂舟	宮崎三昧	明治28
15	目黒物語	渡辺省亭	宮崎三昧	明治28
16	おあき	水野年方	塚原洪柿園	明治28
17	冷熱	富岡永洗	尾崎紅葉	明治29

※『二枚袷』の「挿画」として掲載されているものは、同書の表紙絵である。

表2 『小説挿画集』月の巻(春陽堂, 1898)(国立国会図書館所蔵本を基に作成)

	書籍名	絵師名	著者	出版年
1	五枚姿絵	富岡永洗	広津柳浪	明治25
2	三人妻	武内桂舟	尾崎紅葉	明治25
3	破太鼓	水野年方	村上浪六	明治26
4	蝦夷錦	渡辺省亭	武田仰天子	明治26
5	塙団右衛門	渡辺省亭・久保田米遷	宮崎三昧	明治26
6	浪六漫筆	武内桂舟	村上浪六	明治26
7	有福詩人	渡辺省亭	幸田露伴	明治27
8	大海原	久保田米遷	末広鉄腸	明治27
9	桜の御所	富岡永洗	村井弦斎	明治27
10	台湾陣	稲野年恒	加藤紫芳	明治28
11	やけ火箸	渡辺省亭	巖谷小波	明治28
12	滝口入道	水野年方	高山樗牛	明治28
13	誉の兜	富岡永洗	村井弦斎	明治28
14	豊島嵐	筒井年峰	福地桜痴	明治28
15	朝日桜	鈴木華邨	村井弦斎	明治28
16	浄瑠璃坂	小林永興	塚原洪柿園	明治29
17	血のなみだ	富岡永洗	村井弦斎	明治29

表3 『小説挿画集』花の巻(奥付欠)(国立国会図書館所蔵本を基に作成)

	書籍名	絵師名	著者	出版年
1	井筒女之助	渡辺省亭・水野年方	村上浪六	明治24
2	奴の小万	渡辺省亭	村上浪六	明治25
3	蔦紅葉	武内桂舟	川上眉山	明治25
4	萩桔梗	武内桂舟	巖谷小波・川上眉山	明治25
5	錦の舞衣	武内桂舟	三遊亭円朝	明治26
6	夜嵐	武内桂舟	村上浪六	明治26
7	学園花壇	三島蕉窓	諸名家	明治27
8	嘘八百	三島蕉窓	福地桜痴	明治27
9	柴車	武内桂舟	川上眉山	明治27
10	安田作兵衛	渡辺省亭	村上浪六	明治27
11	たそや行燈	渡辺省亭	村上浪六	明治27
12	衣笠城	小林永興	村井弦斎	明治28
13	不鳴衛	筒井年峰	以心庵	明治28
14	最上川	水野年方	塚原洪柿園	明治28
15	水の声	水野年方	江見水蔭	明治29
16	一人娘	筒井年峰	広津柳浪	明治29
17	壽王冠者	鈴木華村	松居松葉	明治29

表4 『江戸錦』月の巻(春陽堂, 明治44)(オーストラリア国立図書館所蔵本を基に作成)

	書籍名	絵師名	著者	出版年
1	蓮の露	武内桂舟	石橋忍月	明治27
2	蝦夷錦	渡辺省亭	武田仰天子	明治26
3	網代木	武内桂舟	川上眉山	明治29
4	浪六漫筆	武内桂舟	村上浪六	明治26
5	曙の巻	片山春帆	村井弦斎	明治34
6	破太鼓	水野年方	村上浪六	明治26
7	鬼一口	武内桂舟	宮崎三昧	明治28
8	台湾陣	稲野年恒	加藤紫芳	明治28
9	浄瑠璃坂	富岡永洗	塚原渋柿園	明治29
10	豊島嵐	筒井年峰	福地桜痴	明治28
11	目黒物語	渡辺省亭	宮崎三昧	明治28
12	やけ火箸	渡辺省亭	巖谷小波	明治28
13	鎌はぬ坊	富岡永洗	江見水蔭	明治29
14	もしや草紙	水野年方	福地桜痴	明治31
15	有福詩人	渡辺省亭	幸田露伴	明治27
16	おあき	水野年方	塚原渋柿園	明治28
17	朝日桜	鈴木華邨	村井弦斎	明治28
18	大海原	久保田米僊	末広鉄腸	明治27
19	こぼれ萩	武内桂舟	中村花瘦	明治26
20	滝口入道	水野年方	高山樗牛	明治28